様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：20520212
研究課題名（和文）〈９・１１〉以降における現代アメリカ演劇の比較演劇学的研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Contemporary American Performance Cultures after 9.11.

研究代表者
内野　儀(Uchino TADASHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：40168711

研究成果の概要（和文）：2001 年の同時多発テロ以降、現代アメリカ演劇がグローバルな文脈のなかで、どのような展開を見せたかにつき、大まかな認識論的地図を得ることができた。具体的には、アメリカの主要都市に展開する地域劇団、ニューヨークに展開する商業演劇と実験的演劇を研究対象とし、さらに大陸ヨーロッパにおけるフェスティバルカルチャーにおける、アメリカ演劇の受容につき、調査研究を行った。他方、グローバル化の中で大きな変化を遂げつつある現代日本におけるパフォーマンス文化についても、現代アメリカ演劇との関連性を頭に置きながら、考察を続けた。

研究成果の概要（英文）：The research made it possible to draw a comprehensive cognitive map of performance cultures in the United States of America after 9.11. In more concrete terms, the research was targeted at 1) Regional theatres in major cities of the US. 2) Commercial theatre practices (Broadway and Off Broadway) and experimental performance cultures in New York City. 3) The reception and perception of contemporary American performance cultures among continental European festival circuits. In addition, I made some academic considerations toward ever-increasing degree of globalization, especially paying much attention to a comparative study of contemporary Japanese performance cultures and those in the US.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英語・英語圏文学
キーワード：<9・11>、アメリカ演劇、アメリカ研究、カルチュラル・スタディーズ、パフォーマンス研究、比較演劇、比較演劇学。現代アメリカ演劇。現代演劇、舞台芸術

１．研究開始当初の背景

研究者は従来、アメリカ合衆国という文化圏の内部において、演劇というメディアが社会的重要性を増すことになった１９６０年代以降におけるアメリカ現代演劇の研究をさまざまな角度から行なってきた。その成果は研究者の博士論文となった『メロドラマからパフォーマンス――２０世紀アメリカ演

劇論』（２００１年、東京大学出版会）として出版しているが、本書では題名にもあるとおり、２０世紀初頭のユージン・オニール等の劇作家の戯曲研究から１９８０年代にそのピークを迎えるパフォーマンス・アートまで、時代的に言うなら、おおよそ１９９０年前後までがその研究対象となっていた。その後も研究者は、「グローバリゼーション」をキーワードとして、アメリカにとどまらない現代演劇研究を続けてきたが、本研究はそうした研究者の一貫した研究的興味と研究成果の延長線上に位置づけられるものである。

２．研究の目的

本研究では、これまでの研究成果をふまえ、「〈９・１１〉以降」という同時代のキーワードを導入することにより、各国文学研究の下位に位置づけられてきた研究分野としての「演劇」ではなく、大きく変容を遂げつつある世界＝グローバルを理論化・問題化しつつ、文化・芸術実践の重要な場所（サイト）として、アメリカ合衆国＝ローカルにおける２００１年以降のアメリカの現代演劇実践を比較演劇学的に捉えようとするものである。具体的には、

（１）１９６０年代に、ほぼいっせいに発生した前衛演劇と呼ばれる演劇実践の２０世紀末までの系譜について、ドイツ・フランスを中心とするヨーロッパと日本とアメリカ合衆国におけるそれぞれの歴史を丁重にたどり直し、そこで近代的な演劇実践のあり方がどのような変容を遂げたのか、資料的・理論的に理解する。

（２）そうした系譜学的研究を一通り終えた後に、常に演劇実践にともなう上演の制度（劇場・劇団制の問題）、インフラストラクチャー（助成の問題）を該当する該当地域の演劇文化について調査し、そうした制度的側面が演劇実践に及ぼす具体的影響を明らかにする。

（３）１９８０年代以降に発展・展開する文化理論としてのポスト構造主義、フェミニズム、ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズなどの、ヨーロッパ、日本、アメリカにおけるそれぞれの展開を、表象文化論、身体論を中心にしながらあとづける。

（４）さらに、特に１９９０年代以降に展開するグローバリゼーションをめぐる言説についての資料を広い関関心を維持しながら収集し、特に経済をめぐるグローバリゼーションという歴史過程への文化・芸術実践のかかわりについての同時代的思潮を明らかにする。

（５）「〈９・１１〉以降」という文脈の中で、具体的なアメリカ合衆国政府の文化政策の変化（たとえば、愛国法の成立を巡る）等を詳細に調査し、そのことがもたらしたアメリカ国民の意識変化とそれがアメリカ合衆国における演劇実践、さらには「パフォーマンス文化」と呼べるものにもたらした制度的、実践的、主題的、思想的変化を明らかにする。

（６）最終的には、そのような多様な複数性の文脈をたちあげながら、２００１年以降の現代アメリカ演劇実践について、伝統的な演劇のみならず、パフォーマンスの分野についても、その実態についての調査研究を行い、より具体的な演劇実践と「〈９・１１〉以降」という歴史的問題性の関係を明らかにする。

演劇研究が文学研究の領野を離れ、たとえば研究者がそのディシプリンに帰属すると自覚しているパフォーマンス研究という新たなディシプリンを立ち上げてからかなりの時間が経過した。パフォーマンス研究は、「パフォーマンス」という概念をキーワードにして、狭義の演劇や芸術の諸実践から社会的事象まで、さまざまな対象を学際的な方法論によって記述分析しようとする学問分野である。ところが、すでに触れたように演劇の上演はその場かぎりで消えてしまうという研究対象の特性があるため、演劇研究にとって、文化圏的・地域的束縛がいまだかなり強いままでことは否定できない。とはいえ、いわゆるポストモダンの時代を経過し、高級芸術と大衆文化の境界が突破されてしまっている現状を考えても、ますます多様化する演劇実践をより大きな視座から包括的かつ理論的に捉え直す必要性が緊急に存在すると思われ、そのためにはパフォーマンス研究的方法論が重要な役割を果たしうると考えられる。しかしながら、アメリカ合衆国における演劇研究は、たとえパフォーマンス研究を名乗っていても、いまだ国内的な実践をめぐる研究が中心となっており、国境横断的な、即ちグローバルな視座からの研究はようやく手がつけられはじめたところにすぎない。一方、日本における演劇研究は、外国演劇については各国文学研究の下位に位置づけられたままで、アメリカの現代演劇研究も、あるいは日本の現代演劇研究も、ほとんど行われていないのが実情である。行われていないというのが言いすぎであるなら、主として単なる戯曲研究にすぎないものや紹介程度の研究しか行われていないと言ってもよい。たしかに、「〈９・１１〉以降」という文脈において、研究者自身の業績を含め、少なくないジャーナリスティックな文献は書かれてきてはいるものの、当事者的でありすぎたり、あまりに近い時代であるということも手伝って、学術的に意味がある研究はようやく端緒についたところ、というのが現実であろう。こうした日本とアメリカの研究状況からいっても、本研究はどちらの学界にとっても、画期的なスコープをほこる野心的かつ重要な研究であると研究者は自負している。

３．研究の方法

（２００８年度）　本研究は個人で行なうにはかなり大規模なプロジェクトとして構想されており、効率的な方針を立てるのがかなり困難であることが予想される。そこで研究者は、まず、アメリカ側では、１９６０年代以降の現代アメリカ演劇についての研究を主導する立場にあり、研究者の留学中の指導教官だったリチャード・シェクナー教授（ニューヨーク大学パフォーマンス研究科）と、この時代のみならず、現代アメリカ演劇の研究者として、またポスト構造主義批評の論客としてアメリカを代表するハーバート・ブラウ教授（ワシントン大学）、ヨーロッパではヨーロッパ演劇研究の大家であるドイツのハンス＝ティース・レーマン教授（フランクフルト大学教授）の三名に、本研究についてさまざまなご教示をお願いし、また三人が個人的に収集している主として歴史的資料もかなりあるので、それを提供していただくことから本研究をはじめることになった。と同時に、研究者と緊密な関係にある国内有数の舞台芸術研究機関である京都造形芸術大学付属舞台芸術研究センターとの研究内容についての緊密な連携をとった。

さて、初年度の２００８年度においては、「〈９・１１〉以降の現代アメリカ演劇の実態の把握」という観点から、ニューヨークとロスアンジェルスという東海岸と西海岸の演劇の拠点都市と、アメリカ合衆国各地に存在するリージョナル・シアターにおける演劇実践を具体的な研究対象とし、該当する演劇についての基本図書、すなわち現代アメリカ演劇関係の研究書や演劇を扱ったさまざまな雑資料（新聞、大衆雑誌を含めた諸雑誌）の収集を開始した。また、本研究のもう一つの重要なテーマである「〈９・１１〉以降」をめぐる欧米ならびに日本における思想状況を把握するため、多様な学問領域における基本図書を収集・通読した。その際、批評理論にかかわる諸文献――ポスト構造主義、フェミニズム、ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ等々――と、テロリズムやグローバリゼーションをめぐる思想・哲学系の書物が資料収集の中心となった。さらに、演劇の場合、活字メディアだけを見ても、そこから得られるものは限られることが想定されるので、活字メディア以外の演劇実践に関係する映像資料も可能なかぎり収集した。また研究者は、当該年度中に資料収集と研究内容のレビューのため、短期間渡米する計画を立てていたが、校務の関係で断念せざるを得なかった。一方、上記京都造形芸術大学付属舞台芸術研究センターへの出張は行い、センターの関係者と研究についての打ち合わせを行った。こうして収集した資料はかなり膨大な量になったので、パーソナル・コンピュータを用いてその資料の整理を行なった。

（２００９年度以降）シェクナー教授、ブラウ教授、レーマン教授とは研究の進行状況を逐次連絡し、引きつづきご教示いただいた。また、資料的には、初年度の研究の進捗状況によって、何を収集すべきか決定していかなければならないと考えていたが、以下のような資料を収集・通読することになった。ヨーロッパや日本の演劇の制度的側面についての資料（主として、ドイツ、フランスの公共劇場、助成制度をめぐる資料、日本の新劇史と小劇場運動、ならびに国立劇場、文化助成に関する資料）と、具体的上演についての周辺的資料（研究書、上演時のプログラム、劇評等）。ヨーロッパと日本、アメリカの戯曲と演劇史、戯、曲史、文学史関係の資料。ポスト構造主義関係、ポストコロニアリズム関係、フェミニズム関係、カルチュラル・スタディーズ関係の基本的図書と雑誌資料。映像資料については、入手が困難であったり、時間がかかったりすることもあったが、初年度から引きつづき、収集に努力した。また、この期間も引き続き、京都造形芸術大学付属舞台芸術センターと密接な連絡を取りつつ、本研究が国内的文脈での妥当性を失わないように配慮するとともに、本研究成果を研究センターの活動を通じて、日本における舞台芸術実践等、より広範な社会的圏域において、意味を持つように考えてゆくことができた。

４．研究成果

主題が広範にわたっているものであるため、成果を一言でまとめるのは不可能であるが、２００１年９月１１日に起きた同時多発テロ以降、アメリカ合衆国における演劇ないしはパフォーマンスの文化は、ニューヨークを中心に、いわゆる多文化主義のアウトレットとしてのパフォーマンスというこれまでの流れを引き受けつつ、〈アメリカ〉という大文字の理念を問い直す方向へと舵を切ったと大まかには言っておける。しかし、テロの記憶が薄れるにつれ、従前のパフォーマンスの特質であったアイデンティティをめぐる問いへと回帰する方向が強く出てきたと考えられる。一方、大陸ヨーロッパとの関係において、今まで以上に緊密な連携が取られるようになったというのも、〈その後〉における大きな特徴であると考えられる。アメリカの主要都市に存在する地域劇団は、これまで以上に、地域との密接な関係をはかることになり、その意味で、世界的に知られるようになるような芸術実践は、そこから生まれることは従来以上にむずかしくなった。他方、ニューヨークを中心とするより革新的な演

劇実践は、国内の現代美術館や大学、あるいは海外のフェスティバル等での可視性を強めていった。それはまた同時に、グローバル化が進む世界的状況の中で、グローバルなパフォーマンス文化はいかに可能か、という問いへの応答であったとも考えられる。本研究によって、現代アメリカ演劇がかかえる諸問題を把握することができたと考えるが、それを論文や著作にまとめるのは、これからという段階である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 内野儀、続・10 年代の上演系芸術―「ドメスティックな抜けてしまった底」を修復するために、『ユリイカ』、査読有、45 巻 1 号、66-74、2013。
② 内野儀、村上春樹を上演(perform=embody)するために―〈いま、ここ〉のマテリアリティの複雑化ということ、『ユリイカ』、査読有、 42 巻 15 号、183-191、2010。
③ 内野儀、10 年代の上演系芸術―ヨーロッパの「田舎」をやめることについて、『ユリイカ』、査読有、42 巻 10 号. 131-139、2010。
④ 内野儀、科学/ガリレイ/革命―ブレヒト『ガリレイの生涯』をめぐって、『現代思想』、査読有、37 巻 12 号、177-191、2009。
⑤ 内野儀、パフォーマンス研究の現在―パフォーマティヴィティ・身体・認知、『ヒューマン・コミュニケーション研究』、査読有、第 37 号、5-24、2009。
⑥ 内野儀、ベルリンからブリュッセルへ、あるいはポストポリティカルな演劇の風景からアーティストの流動性へ、『舞台芸術』、査読有、第 13 号. 193-203、2008。
⑦ 内野儀、「グローバリゼーションは身体に悪い」、あるいはトランスナショナルな埒外で共振するポストヒューマンな身体について、 『劇場文化』. 査読有、第 12 号、1282-92 、2008。

〔学会発表〕（計１０件）

① UCHINO, Tadashi 、What about Machines?: Technology and Politics in Japan's Contemporary Performance Culture, 2012.11.3., International Symposium of the Korean Society of Dance、招聘講演、成均館大学（ソウル）、2013. 1. 7., International Seminar for Theater Ustav 15th Bharat Rang Mahotsav, 招聘講演、National School of Drama, New Delhi, India。
② UCHINO, Tadashi 、英米の 19 世紀転換期演劇論について、「ヨーロッパ 19 世紀転換期演劇論――演劇映像学連携拠点「翻訳プロジェクト」をめぐって、日本演劇学会秋の研究集会におけるシンポジウムパネラー、2011.12.3.、早稲田大学。
③ UCHINO, Tadashi 、From Humanism to Posthumanism and Back?, Keynote, Asia ICH Performing Arts Forum, 2011.11.26、Studio Theatre, Hong Kong Cultural Center。
④ UCHINO, Tadashi、ドラマの身体――テネシー・ウィリアムズのテクスト的身体、日本英文学会九州支部第 64 回大会におけるシンポジウム「テネシー・ウィリアムズと身体」における研究発表、2011.10.29.、大分大学。
⑤ UCHINO, Tadashi、"Database Animals" and the Avant-garde: Materializing Transnational, Transient Subjectivities in Posthumanity, 2011.9.23., 基調講演、第 4 回広州トリエンナーレ・オープニングシンポジウム、広州美術館。
⑥ UCHINO, Tadashi 、Against the Eurocentric?: From "Cute" to "Outrageous" in Contemporary Performance Culture in Japan, 2011.2.23., 招待講演、Center for Performance Studies, UCLA。
⑦ UCHINO, Tadashi 、What about Machines?: Performing "J-type Technology" in Japan's Contemporary Performance Culture, 2010.10.16, Association for Japanese Literary Studies, the 19th Annual Meeting における基調講演、Yale University。
⑧ 内野儀、グローバルな交渉は起きているし、起きていない――チェルフィッチュによる現在進行形のアトランダムな接合をとりあえず記述=肯定すること、第 5 回表象文化論学会シンポジウム「現代日本文化のグローバルな交渉」、2010.7.3.、青山学院大学。
⑨ UCHINO, Tadashi 、Misperforming and the Everyday: Oshima Nagisa's *Shinjuku Dorobo Nikki* (1968)、Performance Studies International #15, 2009.6.24-27, University of Zagreb, Zagreb, Croatia.
⑩ UCHINO, Tadashi、パフォーマンス研究の現在――パフォーマティヴィティ・身体・認知、日本コミュニケーション学会第 38 回年次大会、基調講演、2008.7.5.、名古屋外国語大学。

〔図書〕（計１件）

UCHINO, Tadashi、*Crucible Bodies – Post-War Japanese Performance From Brecht to the Millennium*、2009、 London: Seagull Books、総頁数 212 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

内野　儀（UCHINO TADSHI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40168711

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：